



Title	スワーミー・サハジヤーナンド・サラスワティー（1889-1950）：北インドの知的風土に育まれた農民運動指導者
Author(s)	桑島, 昭
Citation	アジア太平洋論叢. 2019, 21, p. 27-46
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/100138">https://hdl.handle.net/11094/100138</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# スワーミー・サハジャーナンド・サラスワティー (1889-1950)

—北インドの知的風土に育まれた農民運動指導者—

桑 島 昭\*

1930年代のインド農民運動の代表的な指導者であったスワーミー・サハジャーナンド・サラスワティーの自伝、*Mera Jivan Sangharsh (My Life Struggle)* の英訳が、完訳に近い形で、2015年にワルター・ハウザー氏とカイラーシュ・チャンドラ・ジャー氏の手で出版された<sup>1</sup>。その書評を試みて改めて確認したのは<sup>2</sup>、サハジャーナンドが1940年4月からの約2年間の獄中生活において綴った農民運動の思い出の3部作とも言える『私の生涯にわたる闘い』、『農民組合の思い出』<sup>3</sup>と『農民はいかに闘っているか』<sup>4</sup>に共通する特徴として、しばしば叙述の重要な場面で、広く人々のあいだで知られている諺、警句、詩文に託して自分の考えを表わしていることである。自伝のなかで、社会的な活動に専念する前の時期の回顧については、「世を捨てた」サンニャーシーとして放浪し、インドの古典を取り組んだ「真実の探求者」としてサンスクリット語の詩文からの引用も多い。

ここでは、和訳・英訳を通して理解したいいくつかのサンスクリットの詩文をふくめ、サハジャーナンドが自伝において言及した諺や警句、詩文などを通じて、北インドの農民や庶民の生活観、そして、多様な北インドの文化的風土が、いかに農民指導者の知的形成、そして生涯にわたる「闘い」の姿勢を育んだかをたどりたい。諺や詩文の意味と解釈については、古賀勝郎氏の『北インドの諺』から多くを学んだほか<sup>5</sup>、英訳書の各章の注で警句や詩文をめぐるテーマを詳細に論じたハウザー氏と彼を支えた研究者に負うところが大きい。なお、サ

---

\* 大阪外国语大学 名誉教授

ハジャーナンドの自伝の原文を引用する際には、Bihta editionとして記した<sup>6</sup>。

本稿は、前述した「書評論文」の補論である。

## 注

1. *Culture, Vernacular Politics, and the Peasants: India, 1889-1950-An edited translation of Swami Sahajanand Saraswati's Mera Jivan Sangharsh (My Life Struggle)*, Translated and edited by Walter Hauser with Kailash Chandra Jha, New Delhi: Manohar, 2015.
2. "Review Article": in Sho Kuwajima, *Peasants and Peasant Leaders in Contemporary History-A case of Bihar in India*, Delhi: LG Publishers Distributors, 2017, pp.15-57.
3. スワミー・サハジャーナンド・サラスワティー著、桑島昭訳『農民組合の思い出—インド農民との出会い』嵯峨野書院、2002年。
4. Swami Sahajanand Saraswati, *Kisan Kaise Larte Hein?* (農民はいかに闘っているか), New Delhi: People's Publishing House, 1989.
5. 古賀勝郎『北インドの諺』古賀勝郎、2008年。
6. Swami Sahajanand Saraswati, *Mera Jivan Sangharsh*, Bihta: Shri Sitaramashram, 1952.

## 1. 求道者としてのサハジャーナンド

「万物の夜において、自己を制する聖者は目覚める。万物が目覚める時、それは見つつある聖者の夜である。」(上村勝彦訳『バガヴァッド・ギーター』岩波文庫 1992年 42ページ) 原文は、Bihta edition, p.52.

“When it is night for all beings, the sage is awake; when other beings are awake it is night for the sage.” (Hauser, p.52)

ともに、『ギーター』第2章69の訳である。UP州ガージープル県の村に生まれたナワラング・ラーアイがバナーラスに向かい、サンニャーシーの道に入り、サハジャーナンドの名を得たとき、父や叔母はこれを悲しみ、親類縁者や村人たちは、彼を「正気」に戻らせるため様々な説得を試みた。その一つ、近くに住む「偉大な苦行者」(Barē Mahātmā) など多くの尊称で呼ばれるカーキーが招かれた。彼が日中に眠りに就こうとしたので、その理由を聞くと、『ギーター』

のこの言葉を引いた。サハジャーナンドは、ここに述べられた眠りとは普通の眠りではなく、賢者と愚者の行いと考えの違いを語っているのだと言つて、カーキージーを黙らせた<sup>1</sup>。この後、サハジャーナンドは、家族や村との情緒的なつながりも断ち、頭脳、言葉、行動、そして誠実さのあいだに齟齬のない「真のサンニヤーシー」になることを決意し、そのための旅に出る<sup>2</sup>。

“Andlipon ko kafas men Aavodana le gaya.” (Bihta edition, p.77)

“Water and grain enticed the nightingale into the cage.” (Hauser, p.67)

サハジャーナンドの自伝によれば、当時でも、切符を買わずに汽車に乗り、そのまま降りても車掌が文句を言わない「乗客」は多かった。サハジャーナンドのこの場合は、事情を申し出たためのトラブルである。

サハジャーナンドは、ラリトプルからビーナー（現マッディヤー・プラデーシュ州）への旅に際し、仲間と共にサードゥ（修行者）としてのやむを得ない事情を駅長に訴えて、これまで試みたことのない無賃乗車をしようとした。しかし、車掌は彼を英語も知らない「ほんの子供だ」（“He is not a Sadhu, but a mere child.”）として相手にせず、転轍手の親切な勧めで一つ前の駅で降りると、「物わかりの良い」筈の駅長は車掌に「この二人は泥棒だ。ビーナーでジャーンシー（UP州）までの料金を払わせろ」とまで言った。ところが、ビーナー駅では、集札係が「お通りください、行者さま」（“Jāie, Mahārāj.”）と応じてくれたので、そのまま外に出られた。食事時とも重なり、ギー（精製バター）を売る店で、「プーリーとミターイー」のご馳走まで満喫できた。同じような経験をした詩人の句、「水と穀物がナイシングールを鳥かごに誘い込んだ」を思い出させ、「運の良さ」を感じた。しかし、彼の面前で車掌が吐いた英語の一言は、サハジャーナンドの記憶を離れることがなかった。

サハジャーナンドは、この句に戒めも込めていた。ナルマダ河畔のある町のプラーフマンの家で食事をしていると、「送金するお金があれば、手伝いますよ」という男と会う。聞いてみると、旅の途中で金を集めたサードゥの多くは金持ちで、家族のもとに送金しているとその男は話してくれた<sup>3</sup>。金を持たないサハジャーナンドは、サードゥ、サンニヤーシーの「憎むべき行為」を知る最初の

機会になったと回顧している<sup>4</sup>。

バナーラスに帰っても、ヒンドゥーの宗教指導者、そして、伝統的な学問の学者、パンディットにたいする厳しい姿勢は変わることがなかった。

“Apne bhi gaye aur dusron ko sath lete gaye.” (Bihta edition, p.132)

サハジャーナンドは、無知の領域に「自分だけでなく、他の者をも道ずれにする」パンディットたちを厳しく批判した<sup>5</sup>。のちに農民運動における彼の同志となったジャドゥナンダン・シャルマーを快く迎え入れ、文字から教えることを拒まなかつたパンディット・シヴァクマール・シャーストリーは、数少ないよきパンディットとして挙げられている。

“Likh lorha, parh patthar.” (Bihta edition, p.151)

「乳棒と書いて、石と読む。」(まったく無学の人、愚かな人のたとえ；古賀、225ページ)

1912年、グジャラートへの旅に出たサハジャーナンドは、かつて論破できな  
い学者がいたことで知られる地シッダブルでも、ダンディー(携杖の)・サン  
ニヤーシーが、事実上、「愚者の集団」と化したと嘆いている<sup>6</sup>。

“Per kati tain pallav sincha.” (Bihta edition, p.154)

“— water the tree even while cutting it down.” (Hauser, p.138)

サハジャーナンドがバナーラスで聞いた話。雨季は始まっておらず、アシー  
という名の水路に水はなかつた。川岸の一方にはマハント(僧院主)は住み、他  
方の側に弟子のダンディーたちが住んでいた。川に入れば、「ダルマ」が汚され  
るから、ダンディーたちに川を渡るなというメッセージがあらかじめ伝えられ  
た。やがて、マハントが川のそばに来て、反対側にいたダンディーたちに「教  
え」を説いて帰つた。サハジャーナンドは、宗教の世界には、「木を切り倒しな  
がら、若葉に水をやる」のを正しいと信ずるでたらめがある。「宗教的な問題に  
分別(aql)の余地はない」(Bihta edition, p.154)と批判した。

“Aaye the Haribhajan ko, otan lage Kapas.” (Bihta edition, p.94)

「ご詠歌と一緒に歌いに来たのに、綿の種取りを始めた。」(本来の用事を忘れ、他のつまらないことを始めた ; 古賀、34ページ)

グジャラートのラージコート藩王国を訪れたとき、藩王がかねて解釈に疑問をもっていた『ギーター』の第4章18について、サハジャーナンドが説明すると、藩王は喜び、ディワーン（宰相）の老いた母を始めとして、われもわれもとサハジャーナンドの教えを懇請したため、これでは、藩王家の全員の面倒を見なければならなくなると感じて、そっと逃げ出した。『ギーター』の関連個所は以下の一文である。

「行為の中に無為を見、無為の中に行行為を見る人、彼は人間のうちの知者であり、専心してすべての行為をなす者である。」(上村訳『バガヴァッド・ギーター』52ページ) 原文は、Bihta edition, p.93.

“He who can distinguish between that action done without desire and that action done with desire; he is a sage among men, performing all (prescribed) acts with perfect discipline.” (Hauser, endnote 46, p.106)

冒頭の一句は、たしかに、サハジャーナンドのあわてぶりをよく伝えている。

サハジャーナンドの農民運動指導者への道は、決して直線的なものではなかった。サンニヤーシーとして様々な道を歩き、「世を捨てた」宗教者の安逸や欲望を目の当たりに見、それとは逆に、「この世」の人々の生きるための闘いを心に刻んだ数多くの「経験」を重ねてのち、インドの諸言語で伝わる『バガヴァタ・プラーナ』のなかに表現されている「大衆への奉仕こそ神への奉仕と祈り」(“Janta ki Seva hi Bhagwan ki Seva aur Aaradhna.” Bihta edition, p.167) の思想に到達することができたのである。(Hauser, p.164)

“There should be no bond of affection, if not with a virtuous person;  
Even so, (the bond) with a virtuous person is not always smooth;

Nevertheless, there should be no break or separation;  
But should there be such a break or separation;

That is the nature of life, wanted or unwanted.

(Hauser, p.131. Also see, endnote 28, p.149. For original, see Bihta edition, p.143)

1915年にビハール州ダルバンガーで学んだとき、これまで彼の出会ったパンディットのうちでもっとも鋭い知性の人と感じたパンディット・バールクリシュナ・ミシュラから教えを受けた。サハジャーナンドがダルバンガーを去るとき、ミシュラ氏が自著を手渡す際に、表紙に記したサンスクリットの警句の英訳がこれである。原作者はわからないが、『サンスクリット詩珠玉編』にも載っていることが確認されている<sup>7</sup>。「高徳の人とでなければ愛の絆は生まれず、しかも、絆の維持は平坦とはいえない。その絆が断たれたとしても、望むと否とにかかわらず、それが人生の姿である」とした師のメッセージは、「社会への奉仕」(Samaj Seva) にひとり旅立とうとするサハジャーナンドへの励ましの言葉となった。

## 2. 「自分自身の解脱」(Apnī hī Mukti) から「大衆への奉仕」(Jantā kī Sēvā) へ

1914年、サハジャーナンドは、ブーミハール・ブラーフマン・マハーサバーの大会に乞われて出席した。サハジャーナンドは、ジュジャオティヤー・ブラーフマンの出であるが、このカーストはブーミハールとも婚姻関係を結んでいる。さしあたり、サハジャーナンドの社会活動は、ブラーフマンに認められている権利を妨げられているブーミハールの自尊の運動 (Self-Respect Movement) として出発した。

“Abhi aage bahut kuch hona tha. Yah to Shriganesh matra tha. Ibtida ye Ishq matra tha.” (Bihta edition, p.168)

“The major activity of this phase, however, lay in the future; what was happening now was no more than a beginning.” (Hauser, p. 165, and endnote 13, p.183)

「始まり」の表現として、「シュリー・ガネーシュ」(象の頭を持ち、広くヒンドゥーの間で親しまれているガネーシャ神にものごとを始める時に厄除けを祈願することに起源をもつ) とともに<sup>8</sup>、18世紀から19世紀初めにかけてのムス

リムの詩人ミール・タキー・ミールのウルドゥー語の詩ガザルのよく知られた発句が使われている<sup>9</sup>。

ミールのガザルは、一般にはつぎのような形で知られている<sup>10</sup>。

“Ibtida ye ishq hai rota hai kya

Aage aage dekhie hota hai kya.”

恋ははじまったばかりだよ

もうおまえは泣いている

考えてもみるがいい

この先いったいどうなるか

サハジャーナンドは、これから始まる「大衆への奉仕」の過程で何が起きるかを、ミールのガザルに詠われた恋に託して語っている。ハウゼーは、サハジャーナンドが「すぐれて、19世紀末から20世紀初頭にかけての社会的・文化的環境の産物であった。彼は、あらゆる意味で、1920-30年代の農民政治の領域に広く開かれた文化的資質 (broad ranging cultural qualities) を持ち込んだ農村知識人であった」と記している。(Hauser, endnote 16, p.185) たしかに、サハジャーナンドは、北インドの知識層と農民、庶民によって培われてきた文化的・知的風土の上に立ちながら、サンニャーシーとして「歩いて知る」ことを行動の基底に据え、庶民の叡知を信じ、「経験」(=この先どうなるか)に学びつつ問題の解決を追求した知識人であった。

“Janm bhar sei Kashi par, marne ki ber Magah ke basi.” (Bihta edition, p.226)

“You have lived your whole life in Kashi but at death you find yourself living in Magadh!” (Hauser, endnote 56, p.304)

1920年12月5日、サハジャーナンドは、パートナーでガンディーと会い、インド独立闘争に参加する決意を固めた。最初の獄中体験をバーラスで味わった彼は、ガンディーの教えに従うと称する「ファーストクラス」の政治犯が、貧しい人たちのことは顧慮せず、自分たちの食事の改善要求をしてハンストを行うその態度に失望した。「あなた方は、聖地バーラスで存分に生活した。死はマガダで迎えるだろう。」<sup>11</sup>自分たちだけの自由と特権の追求にたいする疑問こ

そ、サハジャーナンドの社会活動の出発点である。

“Thag thag mauser bhai.” (Bihta edition, p.296)

“—two thieves are like sons of two sisters,-- “(Hauser, p.276)

「2人の盜人は姉妹の子供。」1920年代の半ば、インド国民会議派は、議会参加の路線をも採用したが、1926年議会選挙の渦中に巻き込まれたサハジャーナンドは、ナショナリズムとカースト権益の擁護 (caste favoritism) のあいだに相違がないことを見せつけられた。ナショナリストは、自分のカーストの代弁者でもあった。

“Rahe na bans, na bajhe bansri.” (Bihta edition, p.302)

“If there is no bamboo, there can be no music from the (bamboo) flute.” (Hauser, p.281)

「竹がなければ、竹笛は吹けない。」この句は、自伝の他の箇所でも使われている (Bihta edition, p.66)。1929年、サハジャーナンドは、貧しいブーミハールの会員を排除しようとする富める者の動きが露骨になったため、ブーミハール・プラーフマン・マハーサバーを解体した。マハーサバー (大会議) という名の竹 (=カースト組織) を切り倒したにもかかわらず、その後も、サハジャーナンドは、ブーミハール・カーストの代弁者という批判にさらされ続けた。その困惑と怒りをここに吐露している。 .

1927年末の西パトナー農民組合の成立から1929年のビハール州農民組合の結成にいたる過程におけるサハジャーナンドの役割について、ここでは触れることができない<sup>12</sup>。1930年の「塩のサティヤーグラハ」に始まる独立運動で再び投獄されたサハジャーナンドはまたもガンディーの信奉者たちの獄中での振舞いに嫌気をさし、釈放後は政治のみならず、政治の関わる農民運動からも一時遠ざかった。この間を縫って大地主たちが「農民組合」を結成する動きに走ったが、ジャドゥナンダン・シャルマーなど農民活動家がサハジャーナンドを運動の場に引き戻し、この動きを封じている。

“Mitha-mitha gupp, karva-karva thu.” (Bihta edition, p.415)

「うまいものはがぶがぶ、苦いものはペッペッ。」(古賀、210ページ)

地主は、うまい汁があれば、どんどん入り込んでくる。1933年末、ビハール州ダルバンガー県（現マドゥバニー県）フルパラースにおいて、地主の乗つ取った農民集会で、サハジャーナンドは、農民に地主と妥協しないように、妥協すればその妥協で得たものも、後で奪われると警告する。農民はサハジャーナンドを支持し、集会は成功する。州都パトナーにも予定のあるサハジャーナンドに遠隔の地までの車を用意してくれたのは、農民組合の古い同志であるヤムナー・カルジーのムスリムの友人であった<sup>13</sup>。

“Uunt bilaii le gai to hanji-hanji kahna.” (Bihta edition, p.446)

「『ラクダを猫がさらって行った』と言われたら、『その通りでございます』と相槌を打ちなさい。」(古賀、59ページ)

サハジャーナンドは、グルやパンディット、マウルヴィーなど宗教指導者や学者が説く教えを「ごもっとも、ごもっとも」と受け入れる「宗教」を分別・理性（vivek）の余地がないとして批判した。かれの理解する宗教は「個人的」とがら」であり、個人には自分の考えで宗教を信ずる自由があるとした。サハジャーナンドは、宗教が集団化し、外面向的な表現にこだわることを厳しく批判したのである。サンニヤーシーであったサハジャーナンドは、1930年代、宗教の名において農民に呼びかけることはなかった。

“Karela nim par charh gaya.” (Bihta edition, p. 498 and p.513)

「苦いニームの木に這い上がったニガウリ。」(古賀、79ページ)

1934年、サハジャーナンドは、ガンディーの信奉者たちへの批判にとどまらず、ガンディーと「永久に決別」した。この年1月、ビハール州で大地震が起き、緊急事態下における農民活動家の確保についてガンディーと相談したが、大地主であるダルバンガーのマハーラージャの対応を信じてよいとするガンディーの発言に衝撃を受けたからである。

1937年以降、ビハール州で、国民會議派は、會議派メンバーが農民組合の活

動に参加するのを禁止し始めた。ムンガール県会議派委員会がその趣旨の決議をすると、州会議派委員会もこれを支持した。会議派は、1937年に州で政権の座にも就いている。

一方、バルヒヤー・タールの地主（ザミーンダール）は、農民に権利が発生しないように小作料の受領書を出さず、すべてを口頭で済ませている。その上、これらザミーンダールは会議派の指導者や州首相の「寵愛」を受けている。ともに、鬼に金棒である。

“Partehun bar kathak sanhara.” (Bihta edition, p.441)

“Even in falling he wrecked the army.” (Hauser, p.428 and endnote 153, p.483)

1934年は、ガンディーが会議派を退き、不可触民（ハリジャン）の地位向上に専念すると宣言した年でもある。ここでは、ガンディーが、あれほど強く反対してきた会議派の議会参加を承認し、大衆に開放するという名のもとに会議派を地主や金持ちの組織に変えたとして、16世紀にトゥルシーダースがアワディー語で著わした『ラームチャリト・マーナス：優美の巻』が描く、「退く際に敵軍を壊滅」したハヌマーンにたとえている。

“Jimi dasham maham jibhbechari.” (Bihta edition, p.505)

“Like a poor tongue among clashing teeth.” (Hauser, endnote 102, p.604)

これも『ラームチャリト・マーナス：優美の巻』からの引用である。ガンディーが1917年にインドで最初に「サティヤーグラハ」（1934年にガンディーがパトナーで示した定義では Relentless Search for Truth=真理を求めての飽くなき闘い）を展開したビハール州チャンパーラン県で、会議派は、1937年にサハジャーナンドが「聖地」に来るのを許さず、農民組合の設立をも許すまいとした。しかし、農民運動は集会の妨害などあらゆる障害を乗り越えて、「歯の間で苦闘する舌のように」活路を開いた。

「賢者は行為に執着する愚者たちに、知性の混乱を生じさせてはならぬ。賢者は専心して行為しつつ、愚者たちをして一切の行為にいそしませるべきで

ある。」上村訳『バガヴァッド・ギーター』第3章26 46ページ。サハジャーナンドの原文は最初の一文のみ。(Bihta edition, p.504)

“The sage should not cause discord.” (Hauser, endnote 100, pp.603-4)

会議派は、「賢者は騒ぎを起こしてはならない」の『ギーター』の一句を盾にするかのように、サハジャーナンドの農民集会を妨害したが、農民は会議派指導者の思う通りには動かなかった。チャンパーラン県ビッティハルワ村では、サハジャーナンドも知らなかったムスリムの青年が、自分の畑の豆を引き抜いて、その畑を集会に使ってほしいと申し出た。彼と彼の家族にたいする脅迫にも動じることがなかった。のちに、道路沿いの土地が確保され、集会はそこで行われたが、集会の後、サハジャーナンドは参加者たちとともに、農民の土地を訪れ、その土を額につけて、「農民組合の歴史において、この畑、このムスリム青年は不滅である。このような人々こそ農民組合の基礎を固めるだろう」と感謝と誓いの言葉を述べた<sup>14</sup>。青年の名はヌール・ムハッマドである。ハウザーは、シヴァ派のヒンドゥーの儀礼がムスリム農民の土地で行われていることに注目したが、なによりもサハジャーナンドにとって農民が神であったと記している<sup>15</sup>。

また、ビッティハルワ村は、1917年のガンディーの活動の拠点の一つであつた<sup>16</sup>。ガンディーは、「貧しい農民の無知」をなくす村落教育の必要を痛感し、この村にも出かけ、2番目の学校を開いている<sup>17</sup>。ガンディーの運動は、藍栽培の強制に抗議する農民の「サティヤーグラハ」であったが、実際に農園で働く農業労働者の苦難が正面から取り上げられることはなかった。サハジャーナンドは、1930年代のビハール州農民運動のなかでこの問題の重要性を意識し始め、やがて農業労働者を「眞の農民」として捉えるようになる。

“Bahut dhundha use hamne na paya. Agar paya pata apna na paya.” (Bihta edition, p.558)

“However much we may have searched for the truth, had we found it, we would not have found ourselves.” (Hauser, p.662)

ここで、1930年代後半の長期にわたるバルヒヤー・タールの農民運動、ジャ

ドゥナンダン・シャルマーの指導した1938-39年のレーオラーの「サティヤーグラハ」など最盛期のビハール州農民運動について触ることはできない。「真実を求めるだけ、やっと手に入れたときには、自分を見失っている」という一文は、英訳書の注のなかで、サハジャーナンドの理解するようにヴェーダーンタからの引用ではなく、スーアフィズムのよく知られたテーマであると指摘されている<sup>18</sup>。サハジャーナンドの誤解は別として、彼の思想がイスラームを含むいかに広い視野のなかで形成されていったかを伝えている。

1946年に追加された自伝の「付論」に出てくるこの文章は、サハジャーナンドが個人の自由を制約する政党になぜ入らないかを説明する文脈のなかで披露されている。ただし、サハジャーナンドが、1930年代末から40年代初め、そして、1940年代末にインド国民會議派に対決する「左翼勢力の統一」を呼びかけていたことも事実である。

自身の経験を基礎として、1930年代末に農民運動の思想を凝縮させたサハジャーナンドは、獄中において、1941年6月の独ソ戦開始後、第二次世界大戦の性格が帝国主義戦争から「反ファシズム戦争」に変わったと捉え、反戦から対英戦争協力に転じ、釈放後、農民が積極的役割を担った1942年の「インドを立ち去れ (Quit India) 戦争」にも批判的となった。サハジャーナンドにたいする農民の信頼は揺らいだ。ウルドゥー語でさりげなく語られた重いテーマを彼の大戦期の試練に重ねるならば、戦後70年を経たわれわれにとっても、日常の現実とのかかわりの中で戦争の「名分」を考える貴重な糧となるだろう。

## 結び — サハジャーナンドと現代

サハジャーナンドの自伝を読むと、少年期から農民運動指導者としての時期に至るまで彼の意志の強さに圧倒される。いくつかの例を挙げれば、次のような警句にそれぞれの時期のサハジャーナンドの初志貫徹への思いが表現されている。

“Na dainyam na palāyanam.” (Bihta edition, p.46)

「たじろかず、逃げず。」家族の希望に逆らって、サンニヤーシーへの道を貫

く。原文はサンスクリット語<sup>19</sup>。

“I would neither show my helplessness, nor would I run away from any situation.”  
(Hauser, p.43.)

“Aadha tital aadha betar.” (Bihta edition, p.169)

「半分がミフウズラで半分がイワシャコ。」(どっちつかずの入り交じったものなどのたとえ；古賀、40-41ページ) サハジャーナンドが大衆への奉仕の活動に入る決意のなかで。中途半端は望まず。

“Roke Bhīm hoy chaugna.” (Bihta edition, p.505)

“If there is an effort to stop me in such circumstances, like Bheem, I will become four times more determined and powerful.” (Hauser, p.536 and endnote 101, p.604)

「抑えつけられれば、ビーマのように力4倍。」ビーマは『マハーバーラタ』に出てくるパーンダヴァ五兄弟の2番目(『ヒンディー語=日本語辞典』1012ページ)。出典は不明。ガンディーの運動の「聖地」チャンパーランに踏み込んで農民運動を展開する意志を表わす。

自伝のこのような基調のなかで、英訳書に登場しない次の諺には獨特の味わいがある。

“Tīn lōk se Mathurā nyārī” (Bihta edition, p.354)

「三界に類なきマトゥラーの町」(マトゥラーには、クリシュナ神の誕生地として多数の寺院があり、際立って目立つことのたとえ；古賀、147ページ)

1930年4月、「塩のサティヤーグラハ」で、サハジャーナンドは逮捕され、州都パトナーのバンキップル監獄に入れられた。自伝の表現では、パトナーは、夏は暑さで溝が干上がり、蚊も住みにくい。雨季には汚れた水は雨で洗い流される。そこで、冬に蚊が一番多い。まさに、「三界に類なきマトゥラー(パトナー?)の町」である。バンキップル監獄には蚊帳がない。サハジャーナンドは、監獄内を歩きまわることで、身体を疲れさせ、その勢いで「蚊も知らず、暑さも知らぬ熟睡」をした<sup>20</sup>。「歩いて解決する」サハジャーナンドの面目躍如の場

面である。もちろん、サハジャーナンドは、パートナー市当局による溝の管理の無策を批判しているが、ここには自ら警句を楽しむと同時に、読む者の心を和ませる余裕もある。私がこの諺を忘れないのは、原文の独特的リズムのなかで果たす諺の役割に加えて、1966年3月、パートナーの有名な書店で本を探すどころか、数匹の蚊によってうす暗い店内から追い出された経験を思い出すからである。しかし、何よりも、パートナーとビハール州についてあらゆる嘲笑が浴びせられていた1990年代、一時は市の人口の10分の1に達したと言われるリキシャワーラー（三輪自転車の「力車夫」）を含めパートナーに集まる人たちの生きるための「闘い」を見つめ、そして、ときには強い日差しが容赦なく入り込む空き部屋で、ときには観客が暗い足元を飛び交う蚊を避けながら演技を見守る劇場で、開かれた「文化」を守り、創り出そうとする力強い意志に出会った経験をこの句に込めることができた<sup>21</sup>。

*Mera Jivan Sangharsh (My Life Struggle)* は、サンニヤーシーとして出発したサハジャーナンドの「農民への奉仕」(Kisān Sēvā) に至る闘いの記録である。同時に、北インドの多様な知的風土と、庶民の生活観、日常的な闘いがいかにサハジャーナンドの生涯を育んできたかもその過程から切り離すことはできない。

1930年代初めから1950年まで、第二次世界大戦期の潜伏生活の約2年間を除きサハジャーナンドの同志として行動を共にした農民運動指導者ジャドゥナンダン・シャルマーは、インタビューのなかで、サハジャーナンドが「サンスクリットの傑出した学者であり、ヒンディー語、英語、ウルドゥー語においても高度の能力を持っていた」と讃えている<sup>22</sup>。サハジャーナンドによる詩文、警句、諺の引用の範囲は、『バガヴァッド・ギーター』、『マヌの法典』、『バーガヴァタ・プラーナ』から『ラームチャリト・マーナス』、ミール・タキー・ミールのガザル、スーアフィズム、そして、広く人々の間で親しまれている諺にまで及んでいる。

近年、V. D. サーヴァルカルの著作の題名でもある *Hindutva* (『ヒンドゥーであること』)についての議論が盛んであるが、彼の考える「ヒンドゥー文明」(Hindu Sanskriti) の完成された姿にはムスリムとキリスト教徒を包摂する余地はない<sup>23</sup>。一方、サハジャーナンドの描く世界では、ヒンドゥーの伝統的な学問を

継承しながらも、農民、庶民の生活と知恵の上に成り立つ、開かれた「文化」(Sanskriti)を見ることができる。そこでは、古典や古い諺から学び取った考えも、今を生きる農民、庶民の生活、闘い、そして歴史(サハジャーナンドの言うaqlあるいはvivēk)によって試され、深められている。

サハジャーナンドは、『農民組合の思い出』のなかで、彼の生きた時代に展開された「ヒンディー語・ウルドゥー語論争」に関心を示す政治家たちを横目で見ながら、次のように記して言語を論じた章を締めくくっている<sup>24</sup>。

“Jaise sharir men mans vridhhi hoti hai, waise hi bahari shabd bhasha men latke rahen yah buri hai. Anna-pani ko jaise sharir hazm karta hai waise hi shabdon ko bhasha khud hazm kar le tabhi thiik hoga.” (Swami Sahajanand Saraswati, *Kisan Sabha ke Sansmaran*, Ilahabad: New Literature, 1947, p.166)

「人間の身体にできた腫瘍のように、なじまない言葉が言語にぶら下がっているのは良くない。身体が穀物や水を吸収するように、言語が個々の単語を自らの力で消化できていることが望ましいのである。」

サハジャーナンドの言語観には、無数の農民集会、無名の農民との対話、厳しい農民運動の経験によって支えられた彼の透徹した観察と広く開かれた「文化」を目指す姿勢が映し出されている。1930年代のインド農民運動の指導者というイメージをはるかに超える農民への奉仕者 (Kisan Sēvak)、そして、真実を求める知識人としての発言と行動が現代的意味をもっていることは、この冷静な発言からも読み取ることができよう。*Mera Jivan Sangharsh (My Life Struggle)*を始めサハジャーナンドの著作は、インド農民運動史研究、あるいは地域研究への道案内の書であるとともに、サハジャーナンドの経験に基づいた発言や行動に照らしながら、時には新たな現実に直面したときの彼の苦渋の判断をも参考としながら、インド、そして現代世界の様々な局面を考える豊かな資料を提供している。

1930年代のビハール州農民運動における女性の役割について、サハジャーナンドは多くの個所で繰り返し言及している。最大の闘争の一つ、レーオラーのサティヤーグラハにおける女性の主導的行動はよく知られている<sup>25</sup>。サハジャー

ナンドは「一つの場所も、彼ら（女性）の参加なしには、目的は達せられなかつた」(Ek jagah bhi unke bina kam nahin chala.) と振り返り、「男たちだけの勝利であれば、彼らは女性をこれまで以上に支配したいと思い、繰り返し嫌味を言って回るだろう。どうして、女性たちがこれを許そうか」(akele mard jitenge, to auraton par ve aur bhi shasan karna chahenge aur rah-rah kar tana marte phirenge. Ve aisa kyon hone den?) と断じ、対等な地位の獲得のためにも女性の農民運動への参加が必至であると理解していた<sup>26</sup>。

また、1930年代のビハール州における農民運動の主たる担い手は富農層であったと指摘されることが多いが、サハジャーナンドは、この時期に様々な困難な条件にもかかわらず、農業労働者が自らの権利のために闘っていることに注目し、やがて、彼らを「眞の農民」(Aslī Kisān) として捉えるようになる。「眞のサンニヤーシー」を求めて旅に出たサハジャーナンドは、労働する農民のなかに求めて止まなかつたものを見出したのである。

サハジャーナンドが提起した課題は、いまだ現代的意味を失っていない。

最後に、大阪外国語大学において、南アジア地域の現代政治・政治史を理解するためのヒンディー語テキストとして1980年代にこの自伝を初めて取り上げ、1990年代後半から2000年2月までは毎年、学生の皆さんと共に読むことができたことも記しておきたい。

## 注

1. 上村勝彦訳『バガヴァッド・ギーター』訳注69、152ページ。
2. Hauser, pp.50-3. Also see, Bihta edition, pp.51-3.
3. Hauser, p.67 and endnote 34, p.103.
4. Bihta edition, p.78.
5. Hauser, pp.124-5.
6. Ibid., p.136. Also see, Bihta edition, p.151.
7. Hauser, endnote 28, p.149. 原文は恋についてのお説教であるが、ミシュラは、恋に託し

- てサハジャーナンドが今後進むべき道を示唆している。サンスクリット語の原文に当たっていただいた長崎広子氏からご教示を得た。
8. 古賀勝郎・高橋明編『ヒンディー語=日本語辞典』大修館書店、2006年、1281ページ。
  9. ミール著 松村耕光訳注『ミール狂恋詩集—中世インド抒情詩』平凡社、1996年、8-13、68-70ページ。
  10. 同書 68ページ。この点については、松村耕光氏のご教示を得た。
  11. マガダ=ビハール州中南部のガヤー県、パトナー県を中心とする地域 (『ヒンディー語=日本語辞典』 1028ページ)。  
青年期を活動家として過ごした政治学者で、短編小説をも書いたハルゴーヴィンド・パント (H. G. Pant) は、インド独立運動期の若い政治活動家たちを描いた彼の唯一の長編小説の冒頭で、『マハーバーラタ』における作中人物の死や絞首台に上った革命家バガト・シン (1907-31) の死の意味を問うた後で、15世紀の詩人・宗教改革者のカビールが、死が近づくとみずからバナーラスを離れ、来世はろばに産まれるという話を伝わるマグハル (現在はUP州サント・カビール・ナガル県内にある) に移り、この迷信を打破しようとしたことに触れている (Anshuman, *Mrityunjaya*, Ilahabad: Raka Prakashan, 2002, p.2)。2003年1月、パントはデリーでこの本を私に渡し、翌月に亡くなった。1962-65年のデリーのインド国際問題研究所時代の同僚としては、非常事態下で刻々と動くインドの政治状況について議論することができた。折に触れ、警句や諺の意味の深さを教えてくれたのも彼である。政治から文学にいたるまで自分の言葉で語ることのできる知識人であった。
  12. 桑島昭「インドにおける一農民運動指導者の思想の軌跡—スワミー・サハジャーナンド・サラスワティー (1889-1950)」、サハジャーナンド前掲書、245-320ページ所収。
  13. Hauser, p.407.
  14. Bihta edition, pp.505-6.
  15. Hauser, endnote 103, pp.604-5.
  16. Hauser, endnote 103, p.606.
  17. K. K. Datta, *History of the Freedom Movement in Bihar, Vol. I, 1857-1928*, Patna: Government of Bihar, p.271.
  18. Hauser, endnote 7, pp.678-9.

19. サンスクリット語については、杉本卓洲氏のご教示を得た。
20. Bihta edition, p.355.
21. Bhishm Sahni, "Kabira khara Bazar men", Bharatiya Jannatya Sangh, Patna (IPTA), Patna, July 1993 (ビーシュム・サーへニー作『バーザールに立つカビール』インド人民劇団 (IPTA) パトナー。1993年7月、パトナーにおける公演)。サハジャーナンドがカシュミールを旅行したときに会った若きサーへニーについては、Bihta edition, p.496 and Hauser, p.529 and endnote 81, p.597を参照。  
IPTAの公演とその前年8月の詩の会に案内していただいた詩人のジテンドラ・ラートール (Jitendra Rathore) さんに感謝の意を表わしたい。
22. Kuwajima, op. cit., p.127.
23. V. D. Savarkar, *Hindutva*, Bombay: Veer Savarkar Prakashan, 5<sup>th</sup> edition, 1969 (1<sup>st</sup> edition, 1923), pp.100-1.
24. 前掲『農民組合の思い出』148ページ。
25. Bihta edition, pp.517-21, and Hauser, pp.546-51. また、"An Interview with Pandit Jadunandan Sharma" in Kuwajima, op. cit, pp.106-37, および Kuwajima, "The Reora Satyagraha (1939): Its Contemporary Relevance" in William R. Pinch (ed.), *Speaking of Peasants: Essays on Indian History and Politics in Honor of Walter Hauser*, New Delhi: Manohar Publishers & Distributors, 2008, pp.233-46を参照。
26. Swami Sahajanand Saraswati, *Kisan Kya Karen?* (農民は何をなすべきか), New Delhi: People's Publishing House, 1989, p.107. 原文は1940年に獄中で書かれた。

# A Peasant Leader in the Intellectual Climate of North India

## -Reading Swami Sahajanand Saraswati, *Mera Jivan Sangharsh-*

Sho KUWAJIMA\*

This essay in Japanese was written as a supplementary note to a review article in my book, *Peasants and Peasant Leaders in Contemporary History-A Case of Bihar in India*. Here I tried to trace how the thought and work of Swami Sahajanand was nurtured in the intellectual climate of North India in the late 19<sup>th</sup> century and the early 20<sup>th</sup> century through my reading of popular sayings, aphorisms and proverbs, and the citations from Indian classical writings and others which appeared in Sahajanand, *Mera Jivan Sangharsh*.

I owe a great deal to Professor Walter Hauser and his supporting scholars who translated and expounded aphorisms and poems in the main text and endnotes of an edited English translation of Sahajanand's *Mera Jivan Sangharsh (My Life Struggle)*. I also depended a lot on Professor Koga Katsuro's edited Japanese translation, *Kita Indo no Kotowaza (Proverbs in North India)*, Tsu City, 2008.

The culture (*sanskriti*) which Sahajanand, who studied Indian classical writings, could enjoy while interacting with the life and struggle of the people, was not closed to any community. He walked tirelessly and observed the idleness and desire of the people who lived in 'that' world, and the hard work of the people living in 'this' world. What Sahajanand struggled to find as a sannyasi, he found in the life of the toiling people, and the peasants in particular. He came to believe in the wisdom (*aql or vivēk*) of the people on the basis of his own 'experiences'. Aphorisms and proverbs reflect this reality of life.

---

\* Professor Emeritus, Osaka University of Foreign Studies

Sahajanand, who was in jail during 1940-42, grasped the character of the Second World War after the beginning of the Russo-German War as the 'Anti-Fascist War', but found it difficult to make his view understood among the peasants waging anti-landlord struggles under the British rule. How did his idea of the 'experiences' work at this critical moment of history? If we consider an Urdu couplet which he cited, "Bahut dundha ---." in the context of this dilemma of Sahajanand, his anguish will provide fertile historical lesson to the people of the later generation who want to judge the 'just cause' of the war with the help of their daily experiences.

Swami Sahajanand Saraswati's *Jivan Sangharsh (Life Struggle)* and his thought on language and culture corroborated by innumerable kisan meetings, his dialogue with unknown kisans, and the kisan movement he led, has still its contemporary relevance, and will encourage the people who live at this critical phase of history.

I would like to express my thanks to Mr. Jitendra Rathore, Mr. S. C. Malkoti and the late Prof. H. G. Pant for useful information on the proverbs in the writings of Swami Sahajanand Saraswati. I also have to express my thanks to Mr. Shahabuddin Ansari for information on Ghazipur district and its related publication.